

「次の文章を読み、後の問いに答えなさい。」

大田（俺）は、何の目標も持てずさえない生活を送っていた中学三年生の時に、先生のすすめで駅伝のチームに入り充実した時間を過ごした。走る喜びを知った大田は、高校で陸上部に入部するが、様々な原因から部をやめて、再び前のようなさえない生活を送ることになってしまった。高校二年生の夏休み、大田はひよんなことからアルバイトとして、先輩の娘である鈴香の面倒を見ることになった。はじめは一歳の鈴香に手を焼くが、次第に打ち解けて、毎日公園で遊ぶようになった。公園では愛ちゃんや由奈ちゃんという友達もできた。そんなある日、大田はいつもの公園で、中学陸上部の先生だった上原や陸上部員と出会う。上原に誘われた大田は、部員たちとタイムレースをすることになったのだが……。

「よーい、スタート」

上原の合図に合わせて、一斉にスタートを切る。俺の体もぐんと前に飛び出る。このトラックを七周半。以前の俺なら9分台で走れただろう。あれから二年。無駄に過ごした時間は、俺をどれくらいなまらせてしまっているのだろうか。俺は自分の体を確かめながら、足を進めた。

連なって走っていたのは200メートルほどで、一周を過ぎるとだいぶ差がついてきた。駅伝練習がスタートして、一ヶ月は経っているのだろうか。中学生たちの走りもそれなりに様にはなっている。それでも、まだ夏休みの時点では長距離を走り慣れてないやつが多いようで、俺より前を走るのは二人だけだ。

一番前を走るのは崎山。一定のリズムを刻みながら進んでいる。完全に走り慣れているし、体に負担がかからないような穏やかな走りだ。もう一人は真っ黒に日に焼けたがっちりしたやつ。駅伝のために集められたのだろう、長距離がなじんでないから体が無駄にはねているけど、スピードがある。体にペースが染みついていけば、力が付きそうだ。

「二周目終了、この周78、79、」

スタート地点を通過すると、ラップタイムを読み上げる上原の声が聞こえた。最初の周とほぼ同じタイムだ。このペースで行けば、3000メートル10分を切れる。なかなかいい速度だ。それに、俺の体はまだまだこも疲れてはいない。毎日鈴香の家まで走っているし、ショッピングモールや駅に行くときも走ることが多い。いつもジョグ程度の速さだけれど、心肺は

鍛えられているようで、まだ息も上がっちゃいない。それどころか、ここにきて足や腕にエンジンがかかり、勢いを増している。いいぞ。俺は自分の体に手ごたえを感じた。

「三周通過、この周76、77、78……」

1200メートルを過ぎても、まだ速度は落ちていなかった。練習を積んだ中学生と対等に走れるなんて思った以上だ。崎山が3メートルほど前を走り、俺の真前に色黒のやつが足音を響かせながら走っている。パワフルな走りに、最後まで持つのだろうか、とこっちが心配になってしまう。ほかの六人はだんだん後れを取り始め、半周近くの差が開いているやつもでてきた。

「四周終了、この周77、78」

1600メートルを通過し、俺は上原の読み上げるタイムに、驚いた。一番前に行くすらしとした背中。崎山のペースは一切乱れていない。なんとという正確な走りだろう。その一方で、俺はだんだん息が上がってきた。前に行く色黒のやつも俺と同じように息が乱れている。さすがにこの速度で3キロを走るのはきつい。だけど、9分台で走るには、崎山から離れてはだめだ。俺は腕を軽く振って息を整えると、もう一度足に力を込めた。ここで少し勢いをつけよう。パワーのあるうちに詰めておかなくては。わりいな。俺は心の中でつぶやきながら、すぐ前を走る背中を追い抜いた。

「五周目、76、77、78……、残り二周半」

2000メートル経過。それでも崎山は速くなることも遅くなることもせず、同じ間隔で足を運んでいる。一年生で駅伝練習に参加していたときは、か弱くすぐにバテていたというのに。こいつはこの二年、どれだけ練習を積んできたのだろう。俺とは全然違う毎日を重ねてきたはずだ。うっかり気を抜いたら一気に離されてしまう。俺はしっかりと背中を見つめ、前へ前へ足を運んだ。

「六周経過、この周79、80……。残り一周半」

上原の声が響く。あと600メートルだ。七周目に入って、俺は周回遅れのやつを二人抜いた。そのたびに少しペースが崩れ、息が上がる。先に行く崎山は誰かを抜かしてもペースに変動がない。相変わらずリズムを刻むように走っていく。細いけれど、体幹が鍛えられているのだろう。体はまったくぶれがない。すげえペースメーカーだ。このまま、崎山について

いけさえすれば、俺も9分台で3キロを走りきれぬだろう。

3 いや、それじゃだめだ。これではおもしろくない。この走りは俺の走りとは違う。体が空っぽになっていくあの快感はまじやあってきていない。ここでスパートをかけるのは早すぎるし、もう体も疲れかけている。でも、このペースから外れたいと、跳び出したいと体は言っている。あとのことはどうだっていい。体中弾ませて、無鉄砲でも前に向かっていく走り。それが俺の走りだ。それをしなくちゃ走る意味はない。大きく腕を振ると、俺は体ごと前に送り出した。その勢いにちゃんと足も付いてくる。よし、いける。俺は大きく息を吐くと、そのまま崎山を抜き去った。

「あと、一周400メートル」

上原の声が聞こえ、崎山もペースを上げ俺につけてきた。さすが部長だ。まだ余力を残していたんだな。悪いけど、負けてはられない。体があの夏を思い出して、何度も何度もスパートをかけている。あのころの俺はいつも弾丸のように走っていた。レース展開なんて考えず、ただゴールに向かうことに、ただタスキを渡すことに、必死だった。

「ラスト200、がんばって」

ここからはもう短距離だ。このままゴールまで一息に行こう。だけど、さすがに俺の体は重くなって足の回転が遅くなり出した。むやみにかけたスパートのせいで、息も完全に乱れている。そんな俺に反して、崎山は自分のペースを取り戻し、真後ろにびったりとついてきている。そして、「やっぱり正しい走りが一番なんだな」そう思った瞬間に、するりと抜かされてしまった。

当然だ。たまたま調子よく走っていただけで、まじめにやってるやつにかなうわけがない。高校の陸上部もいつのまにかやめて、何ひとつやりきっていない俺が勝てるほどレースは甘くないのだ。どんどん崎山の背中が遠のいていく。こうなったら、二位だけは保たないとな。せめて9分台で走りきろう。そう呼吸を整えて、腕を軽く揺すったところに、声が飛んできた。

「おじさん、ファイト！」

愛ちゃんと由奈ちゃんの声だ。

「ほら、しっかりー！ 前離れてるよ！」

お母さんたちも大きな声で応援してくれている。

「がんばってー」

そして、一番よく聞こえるのは、みんなのまねをして叫ぶつたない鈴香の言葉だ。

中学校駅伝のブロック大会。駅伝は6区間もあるから、わざわざ俺が走る2区を応援しにくるやつなど誰もいなかった。他校の選手への声援が飛ぶ中、俺は孤独にそれでもがむしゃらに走っていた。そんな最後の上り坂。声援を浴びた他の選手が加速し、俺を引き離れたときだ。担任の小野田の声が聞こえた。「走れ！ お前ならやれる」って。その声で俺の体は、勢いがついたんだっけ。

「前抜けるよ！」

「あと少しファイト！」

4 お母さんたちの声援の合間に、愛ちゃんたちがきやあきやあ叫び、そのそばで、鈴香は「ぶんぶー」と「ばんばってー」を繰り返している。

ただのタイムトライアル。それなのに、声をかけられると、残された力が沸き立ってくる。まだ余力があったのかと自分で驚くくらい、手にも足にも力が満ちていく。崎山の背中が手を伸ばせば届くところに近づいた。残りは50メートル。ここですべてを出し切ってやる。毎日走ってるやつらには悪いけど、俺はやれるんだ。俺は走りたかったんだ。お前以上に、ずっとこんなふう走りたかったんだ。

「ラストー、ファイト。ここまで」

ゴール地点に、俺は倒れこむように突入した。なりふりかまわずただ前に突っ込んだ。そして、倒れこんだ分だけ、崎山よりわずかに先に走りぬいた。

ゴールした俺はそのまま動けずべたりと座り込んでしまったけれど、崎山は涼しい顔で汗をぬぐっただけだった。

「お前、すごいじゃん」

俺は思わず崎山を見上げて言った。

「負けるわけないって思ってたんですけど……。さすがっすね」

⁵ 崎山はそんな俺に静かに微笑んだ。

「いや、完全にレースはお前の勝ちだわ。あと10メートルでもあったら完敗だ」

俺は正直に言った。最後の最後、ただ声援に乗せられて体が進んだだけだ。

「駅伝では、僕も倒れるまで走ります」

「そんなことしたら、お前ダントツ一位だな」

「ありがとうございます」

崎山は軽く頭を下げると、ほかのやつらに「腕を振れよ」「あと200」などと声をかけ始めた。

すごいよな。中学生って。走りきって疲れた後に、俺に負けて悔しい気持ちのまま、誰かに声を送れるなんて。

俺はその様子を見ながら上原にもらったアクエリアスを飲みほした。もう高校生になってしまった俺は、たかだか3000メートル走っただけで、完全に体は空っぽで、立ち上がることも声を出すこともできないくらいへばっていた。

「まだまだ走れるんだね」

ようやく立ち上がった俺に、上原が言った。

「そうみたいだな」

俺はトラックを眺めながら答えた。駅伝チームのやつらはタイムトライアルを終え、ジョグを始めている。⁶ 走り終えたみんなは、穏やかですっきりしたい顔をしている。

「大田君もダウンしといたほうがいいんじゃない？」

「いや、いいわ」

「そう？ 勢いよく走ってたから、明日体にきそうだけど」

明日まで待たなくても、すでに太ももやふくらはぎは張っている。だけど、さすがに中学生たちと並んでジョグするのは

照れる。

「俺、走りたかったんだ……」

俺は一つになって走る八人の背中を見ながら言った。あの中に入りたいわけではない。でも、あんなふうに走れたらいいだろうなと思う。

「また走ればいいじゃない」

上原が何でもないことのように言った。

「そんなうまいくいかよ。俺の高校の陸上部なんて活動してないのも同然だから。ま、あの高校に入った時点で終わったって感じだけだな」

「大田君、トラック専門に変更したの？」

上原が首をかしげた。

「何も専門でやってねえけど」

「じゃあ、グラウンド以外も走ればいいじゃん。高校の陸上部って、学校のグラウンドしか走っちゃいけないわけじゃないんでしょ。駅伝のときは、校外も走ってたじゃない。あぜ道も山道もアスファルトも」

⁷ 上原の言うとおりで。だけど、そうじゃない。俺はただ走りたいんじゃない。どこでも走ればいいってわけではない。それでいいなら、俺は毎日走ってる。そうじゃないんだ。さっきの3000メートルみたいに、仲間じゃなくなっちゃったっていい、友達じゃなくなっちゃったっていい。誰だかっていいから、誰かと同じ場所へ向かって、体を、気持ちを動かしたい。苦しくて辛くたってかまわない。じっとしてはられない、体が自然に動くあの衝動。それに従ってみたいんだ。

「まあ、そうなんだけどさ」

どう言っているかわからず、あいまに答えると、上原は、

⁸ 「レースはどこでだって行われてるよ」

と言った。

「そっか？」

「そうだよ。いつだって、どこだって、だいたい誰かが走ってる。それに、大田君を駆り立てるものだって、そこら中に転がってる」

上原ははつきりと言った。

そうだとすると、その場所をどうやって探せばいいのだろう。どうすればそこへたどり着けるのだろう。もう中学生じゃないんだ。義務教育を卒業した俺を、わざわざ引張ってくれるやつはいない。この手を自分で伸ばして、この足で向かわなくてはいけない。それはとても難しい。

「もうガキじゃねえんだから、誰かが手を差し伸べて引張ってくれるのを待ってたら、だめなんだよな……」

俺がつぶやくのに、上原が、

「そんなこともないんじゃない？ あそこで、大田君に必死で手を伸ばしてる子がいるけど」と笑った。

「あ、ああ。鈴香だ」

ベンチのほうに顔を向けると、鈴香は「ぶんぶー」と言いながら俺のほうへ手を伸ばしている。練習の邪魔にならないようにと、お母さんたちに押さえられながら、手を振っている。あの小さな手は、くたくたになるまで、俺を走らせてくれる。どうやら、今は鈴香のもとへ行くことがやるべきことのようにだ。

「俺、そろそろ行くわ。あ、そうだ。二学期になったら、たまに駅伝練習見に行つてやろうか」

俺の申し出に、すぐさま「やめてよ」と上原は首を振った。俺が中学生のときにも、たまに卒業生が来ていたし、駅伝チームにとってもいい刺激になりそうなのに。首をかしげる俺に、

「大田君の走る場所は中学校にはないよ」¹¹

と上原が言った。

「あんだよ、それ」

「大田君が走るの、今まで通ってきた場所じゃなくて、これから先にあるってこと。まだ十六歳なんだから。わざわざ振り返らなくなったって、たくさんフィールドが大田君を待ってるよ」

「そう、なのかな」

なんとなく教師らしい発言に、俺が素直にうなずくと、

「本当は大田君が来たら、みんなびびって練習にならないしね。それに、金髪で中学校入られたら、教頭先生に文句言われそうだし」

と上原は肩をすくめた。

「まったく、失礼なやつだな」

「ごめんね。教頭先生に怒られるの面倒だから」

上原はへへへと笑った。こいつと話していると、本当に気が抜ける。

「ま、ほかの場所探すわ。今年も県大会出てくれよな」

俺がそう言うと、

「うん。わかった。大田君もがんばって」

と上原は軽く手を振った。

がんばってか。すでに努力している相手に失礼な言葉だとか、プレッシャーを与える言葉だとか、小難しいことを言うやつもいる。

でも、シンプルでいい言葉だ。「がんばって」そう言葉をかけてくれる人間がいるだけで、自分も捨てたものじゃないと思える。

「ぶんぶー、ばんばってー」

「もう終わったよ」

愛ちゃんたちに笑われながら、覚えてたの言葉を使うのがうれしいのだろう。鈴香は何度も俺にそう叫んでいる。

よし。アクエリアスを飲んで体も回復したし、最終目的までダッシュするか。¹²俺は残っている力すべてを使って、最大の声援を送ってくれた鈴香たちのもとへ向かった。

問一——線部1「いいぞ。俺は自分の体に手ごたえを感じた」とあるが、この時の「俺」の気持ちとして適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 久しぶりにタイムトライアルを走るのは不安ではあったが、走り出してみればそんな不安はすぐにふき飛んで、走ることに楽しくてたまらなくなっている。

イ 競技として走るのは久しぶりだが、毎日走っていたことが結果的にはトレーニングになっており、思ったより調子よく走れていることに満足している。

ウ 久しぶりとは言え、上原にみつともない走りは見せたくないと思っていたが、二周目を終え勢いがつき、上原に良いところを見せられると安心していい。

エ 久しぶりに走っているのに、一周目と同じラップタイムで二周目を走ることができ、走るリズムを身体が覚えていたことをうれしく思っている。

問二——線部2「俺とは全然違う毎日を重ねてきたはずだ」とあるが、この時の「俺」の気持ちとして適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 高校の陸上部もやめ、ともに走る仲間を失って孤独を感じている自分とは違い、仲間に囲まれて充実した練習を続けてこられた崎山のことをうらやましく思っている。

イ この二年間まじめに練習したことで大きな成長をとげた崎山に力強さを感じ、ろくに練習してこなかった自分にはとうていかなわないとあきらめの気持ちが生じている。

ウ それほど努力しなくても中学の駅伝では活躍できた自分とは違い、初めは弱かった崎山がこれほど速く走れるようになるには相当な努力をしたはずだと感心している。

エ 打ちこめることのないままこの二年を過ごしてきた自分をふがいなく思うとともに、その間ひたむきに練習してきたであろう崎山の充実した様子に手ごたえを感じている。

問三——線部3「いや、それじゃだめだ。これではおもしろくない」とあるが、この時の「俺」の思いとして適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア すぐれたペースメーカーである崎山にあわせて走っていくのではなく、常にトップでゴールを目指すような自分本来の走りをしたいたいと思っている。

イ 正確なラップを刻む崎山の走りに揺さぶりをかけて今後の崎山の成長をうながすような走りをしたくない、自分が走る意味はないと思っている。

ウ 一定のリズムに乗って最後まで安定した走りをするのではなく、ペースは崩してでもすべての力を出し切るような走りをしたいたいと思っている。

エ たとえこのままのペースに乗って九分台で走るといふ目標を達成できたとしても、一位でゴールに入らないと意味がないと思っている。

問四——線部4「お母さんたちの声援の合間に、——繰り返している」とあるが、この声援を受けて、「俺」はどのような気持ちになったか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア お母さんたちや女の子たちのはなやかな応援に乗せられていい気持ちになり、がらにもなく全力をふりしほつてがむしゃらに走ろうという気持ちになった。

イ ただのタイムトライアルだからといまひとつ気合が入っていなかったが、にぎやかな応援を受けて気分が盛り上がり、絶対に勝つんだという気持ちになった。

ウ 弱気になりかけていたところに、自分のことを大切に思ってくれる人の声援を受けたことで、力を取り戻すことができ、まだやれるという気持ちになった。

エ 自分が今こうして走っているのは、自分自身のためだけではないことに気づき、自分を応援してくれる人のためにも全力で走ろうという気持ちになった。

問五 — 線部5「崎山はそんな俺に静かに微笑んだ」とあるが、崎山はなぜ「静かに微笑んだ」のか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 走ることをやめた今の太田ではもはや自分の相手にはならないだろうと思っていたが、その油断が原因で敗北したことが悔しく、未熟な自分のことを笑いたくなくなったから。

イ 練習を積んでいない太田にまともな走りができるわけがないと思っていたが、最後まで力をふりしぼって走り抜きゴールに倒れこんだ姿を見て、太田のことを見直したから。

ウ かつて一度も勝つことができなかった太田に今日こそは必ず勝つと思っていたが、なりふりかまわず全力で走った太田に惜しくも敗れ、悔しくもすがすがしい気分になったから。

エ 地道にトレーニングをしてきた自分の走りに自信を持っていたが、上原のしている前で太田に自分の実力をほめられたことが気はずかしく、照れくさい気持ちになったから。

問六 — 線部6「走り終えたみんなは、穏やかですっきりしたい顔をしている」とあるが、太田の目にどのように映るのはなぜか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 夢中になれるものに全力を注ごうとしている中学生たちの姿は、同じように陸上競技に夢中になっていた自分自身とも重なり、うらやましく、すばらしいものに感じられたから。

イ 好きなことに取り組めるといっただけで満足そうな中学生たちの姿は、久しぶりに好きなことに打ち込む喜びを味わった自分自身とも重なり、ほほえましく、心温まる思いがしたから。

ウ たがいにライバル意識を持ち競い合っている中学生たちの姿は、高校で仲間恵まれずに孤独な日々を送っている自分とは違って、晴れ晴れとして、楽しそうに見えたから。

エ 結果にとらわれず一つの物事に対してがむしゃらになれる中学生たちの姿は、レースの結果にこだわってしまった自分とは違って、さわやかで、すがすがしいものに思えたから。

問七 — 線部7「上原の言うとおりだ。だけど、そうじゃない」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学校のトラックよりあぜ道や山道やアスファルトで走る方が向いているというのはその通りだが、ただどこでも走ればよいのではなく、感動できるような走りがしたいのだということ。

イ 学校のグラウンド以外で陸上部が活動しても校則違反にはならないというのはその通りだが、ただ活動できればよいのではなく、練習やレースを通して充実感を味わいたいのだということ。

ウ 高校の部活動だけにしぼられることなく、自由に走ったらよいというのはその通りだが、ただ一人で走るのではなく、中学の駅伝の時に仲間とともに走る喜びを感じたいのだということ。

エ 学校のグラウンド以外でも走れる所はいくらでもあるというのはその通りだが、ただ一人でどこかを走ればよいのではなく、同じゴールに向かって誰かと一緒に走りたいのだということ。

問八 — 線部8「レースはどこでだって行われてるよ」とあるが、この上原の発言を説明したものとして適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ただ走るのではなく、自分の力をためることができるところを探している太田の気持ちを感じ取り、まずはレースに出たらどうかと提案している。

イ 学校という枠にとらわれて自分の力をもてあましている太田に、学校の外へ目を向けて、広い世界に飛び出していくべきだとすすめている。

ウ 一人で走ることに孤独を感じてきた太田の気持ちを感じ取り、たくさんの人と一緒にゴールを目指すレースへの参加をうながそうとしている。

エ 自分の生きがいを見つけられずにいる太田に、自分をかけることができるものは、実はいたるところにあるということを示してはげましている。

問九 ——線部9「あそこで、大田君に必死で手を伸ばしてる子がいるけど」とあるが、上原はどういうことを伝えようとしているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 誰かの助けを必要とする時には、年齢わんねいに関係なくまずは必死に手を前に伸ばし、助けを求める自分に気づいてもらわなくてはならないということ。

イ 高校生になったのだから、自分を必要とする人が差し伸べる手をしっかりつかむことで、その人の信頼しんらいにこたえられる人になってほしいということ。

ウ 中学校を卒業した後であっても、時には誰かが差し出してくれる手をたよりにしながら、自分の生きる道を探していても良いのだということ。

エ もう中学生ではないのだから、自分の居場所は自分で見つけるべきだが、たまには大切な人の手を取ることであらぎを得る時間も必要だということ。

問十 ——線部10「あの小さな手は、くたくたになるまで、俺を走らせてくれる」とあるが、どのようなことを表しているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 鈴香のためならできる限りのことをしてやりたいと思うほど、今の自分にとって鈴香が大切な存在であるということ。

イ わがままな鈴香に振りまわされ、あちこち走りまわらされてしまうことで、いつもへとへとになっているということ。

ウ 自分を疲れさせる存在ではあるが、まだ幼い鈴香を放っておくことができずに、つい面倒をみてしまうということ。

エ いつも全身で何かをうったえ、全力で何かをしようとする鈴香がいとおしく、何でもやってやりたくなるということ。

問十一 ——線部11「大田君の走る場所は中学校にはないよ」とあるが、上原はどういうことを伝えようとしているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 駅伝には出場したが陸上部に正式に所属してはいたわけではないのだから、中学校に来て大田が走る場所は用意できないということ。

イ 中学校に戻ってこなくても、大田が活躍できる場所はいくらでもあるのだから、今は前を向いて新しい道を進んでいってほしいということ。

ウ 中学校で陸上部の部員たちと走るよりも、今は大田のことを必要としている鈴香のために、一生懸命いっしよけんめい走り続ける方が良いということ。

エ 気が進まないのは分かるが、通い慣れた中学校に逃げ込むのではなく、高校の陸上部で自分の走る場所を見つけるべきだということ。

問十二 ——線部12「俺は残っている力すべてを使って、最大限の声援を送ってくれた鈴香たちのもとへ向かった」とあるが、スタートした時とこの時とは大田の心境に変化がみられ、その変化は「ばんばってー」という声援を送ってくれていた鈴香が、大田に何かを気づかせてくれたから起きたものでもあると考えられる。大田の心境がどのように変化したのかを、鈴香が大田に気づかせてくれたことに触れながら、八〇字以上、一〇〇字以内で説明しなさい。ただし、次の言葉を必ず用いて答えること。

高校

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

1 ひとりで勝手にお掃除してくれるロボット。その能力を飛躍的に向上させるなら、わたしたちの仕事をいつかは奪ってしまふのではないかと心配する向きもある。しかし、もうしばらくは大丈夫なのではないかと思う。一緒に暮らしはじめてみると、その「弱さ」もいくつか気になるのだ。

玄関などの段差から落ちてしまうと、そこからはなかなか這い上がれない。部屋の隅にあるコード類を巻き込んでギブアップしたり、時には椅子やテーブルなどに囲まれ、その袋小路から抜けだせなくなりそうになる。「アホだなあ……」と思いつつも、そんな姿になんとかなくほっとしてしまふ。

こうした関わりの中で、わたしたちの心構えもわずかに変化してくる。ロボットのスイッチを入れる前に、部屋の隅のコードを**a**、**b**ねはじめる。ロボットの先回りをしては、床の上に**ランザツ**に置かれたモノを取り除いたりする。いつの間にか、部屋のなかはきれいに片づいている。このロボットの意図していたことではないにせよ、周りの手助けを上手に引きだしながら、結果として「部屋のなかをお掃除する」という目的を果たしてしまふ。これも、まさしく「関係論的なロボット」の仲間だったのである。

先に述べたように「コードを巻き込んで、ギブアップしやすい」というのは、一種の欠陥や欠点であり、本来は克服されるべきものだろう（じつは、いつの間にかパワーアップされたお掃除ロボットの仲間は、こうした欠点を克服しつつある……）。しかし、その見方を変えるなら、この「弱さ」は、「わたしたちに一緒にお掃除に参加するための余地や余白を残してくれている」ともいえるのだ。

4 そこで一緒にお掃除する様子を眺めてみるとおもしろい。わたしたちとロボットとは、お互いに部屋を片づける能力を競いあいながら、この掃除に参加している風ではない。どこまで手伝えばいいのか、どのような工夫をすれば、このロボットは最後まで完遂してくれるのか。そうした試行錯誤を重ねるなかで、お互いの得手、不得手を特定しあう。目の前の課題に対して、その連携のあり方を探ろうとする。「相手と心をつなげる」というところまで、まだ距離はありそうだけど、ようやくその入り口に立てたような感じもするのである。

床の上のホコリを丁寧に吸い集めるのは、ロボットの得意とするところであり、わたしたちに真似はできない。一方で、ロボットの進行を先回りしながら、椅子を並べかえ、**シヨウガイブツ**を取り除いてあげることは、わたしたちの得意とするところだろう。一緒にお掃除しながらも、お互いの「強み」を生かしつつ、同時にお互いの「弱さ」を補完しあっている。これも多様性というのだろうか、そこでは部屋の壁、わたしたち、そして健気なお掃除ロボットという、さまざまな個性やそれぞれの技が協働しあっている心地よい。そうした高度な関わりにおいては、ロボットはすべての能力を自らのなかに抱え込む必要はない。わたしたちもまた完全である必要はないということなのだろう。

6 でもどうして、このような連携プレーが可能なのだろう。一つにはこのロボットの性格から来るものなのではないかと思う。ぶつかるのを知ってか識らずか、部屋の壁に果敢に突き進んでいく。コードに巻きついていても、そこからなかなか離れようとはせず、遂にはギブアップ……。そんな失敗をなんどくりかえしても、懲りることがない。

そのようなロボットのあつげらんとした振る舞いに対して、「どうして壁にぶつかると知っていて、ぶつかるのだろう。アホだなあ……」と思いつつも、いつの間にか応援してしまふ。

先に述べたように、わたしたちの共同行為を生みだすためのポイントは、自らの状況を相手からも参照可能なように表示しておくことである。「いま、どんなことをしようとしているのか」「どんなことに困っているのか」、そうした「弱さ」を隠さず、ためらうことなく開示しておくことで、お掃除ロボットは周りの手助けを上手に引きだしているようなのである。もう一つのポイントは、相手に対する「敬意」や「信頼」のようなものではないだろうか。お互いの「弱い」ところを開示しあい、そして補いあう。一方で、その「強み」を称えあっている。このお掃除ロボットは相手を信頼してなのか、その部屋の壁になんのためらいもなく、**ユダ**ねることをする。一方で、わたしたちも「へー、こんなところのホコリを丹念に吸い集めてしまうわけ?」「すごい、これには敵わないなあ……」というわけで、「ここはロボットに任せておこう!」ということを徹底させている。

人とロボットとの共生という言葉があるけれど、自らをわきまえたお掃除ロボットは、わたしたちとのあいだで、持ちつ持たれつという共生をちゃんと成功させているようなのである。

「こしばらくの「利便性を追求する」というモノ作りの流れは、個々の〈弱さ〉を克服することに向けられてきたようだ。いわゆる「ひとりでもできるもん！」をめざそうというのである。そこで一面的な利便性は高まるように思うけれど、一方では〈持ちつ持たれつの関係〉から遠ざかってもいるようだ。

例のお掃除ロボットがもつ完璧にお掃除するものであったらどうだろう。もうコードに巻きついてギブアップすることもなければ、ちょっとした段差であれば大丈夫！ 誰の助けも借りることなく、きっちりと仕事をこなしてくれる。そのこととわたしたちの間もだいたいバフ^eけることだろう。ただどうだろう、それでおしまいということにはならないようなのだ。すかさず「もつと静かにできないの？」「もつと早く終わらないのかなあ」「この取りこぼしはどうなの？」と、その働きに対する要求をエスカレートさせてしまう。そうした要求に応えるべく、技術者も新たな機能の開発に勤しむことに。⁸ ロボットの高性能さは、わたしたちの優しさや工夫を引きだすのではなく、むしろ傲慢さのようなものを引きだしてしまうようなのだ。

これはお掃除ロボットに限らず、他の家電製品などにも当てはまるものだろう。量販店に並ぶ商品には、「新機能」と称して、毎年のように新たな工夫が加えられる。「今年の電子レンジは、サククリ解凍機能がついてるんです！」との店員のアピールに、「えっ、そのサククリ解凍って、なに？」と思いつつも、なにげなく選んでしまう。同じ価格であれば、その新たな機能がついているというだけで、ちよつと得した気分になるからだろう。そうしたこともあってか、作り手としても手を緩めるわけにいかない。これは、いわゆる〈足し算のデザイン〉の姿であり、認知工学者のドナルド・ノーマンの指摘した「なし崩しの機能追加主義」そのものだろう。「もつと、もつと」という要求のなかで、いつの間にか消耗戦を強いられてしまうことだろう。

「お掃除してくれるロボット」と〈それをを使う人〉、その役割のあいだに線を引いた途端に、相手に対する要求水準を上げてしまう。こうした図式は、モノとの関わりに限らず、いま至るところに生じているようなのだ。

おばあちゃんの世話をするというなげない関わりが職業となった途端に、「もつと、もつと」と、相手に対する要求を高めてしまう。その結果、〈介護する人〉と〈介護される人〉とのあいだに垣根が生まれてしまう。あるいは、至れり尽くせりの講義を準備すればするほど、〈教師〉に対して「もつと大きな声で、もつと手際よく」と〈学生たち〉からの要求が

エスカレートしてしまうこともある。

こうした場面に遭遇するたびに、お掃除ロボットの気ままさやあつげらんとした姿もいいなあと思う。老練な教師ならばすでに心得ているように、「この説明では誰も理解できないだろう……」という講義も何回かに一度は許されてもいい。時には「えっ、なにこれ？ ちよつとわからない、どうしよう……」という学生たちの緊張感も必要だろうと思う。少し緊張した関係性がむしろ豊かな学びを引きだしているようなのだ。

防災分野などでも「防潮堤の存在ゆえに、住民の避難行動に遅れが生じる」という。津波の災害にあうたびに、「あの防潮堤をもつと高くして！」との要求が高まるけれども、それにも限度はある。「これくらいの高さがあれば、きつと大丈夫！」と防潮堤はいつも強がろうとするけれど、ときには〈弱さ〉を認め、開示することも必要なのだろう。「あれっ、今回はちよつと危ないかも……」と早めにつぶやいてくれたら、それに対するわたしたちの備えや工夫をもつと引きだせるはずなのだ。

同様のことは、いま各方面から期待されつつある人工知能やロボットにも当てはまるものだ。自動で運転をしてくれるクルマというのも便利そうだけれど、いつも強がってはばかりではどうかと思う。「ちよつと、こんな霧では自信がないなあ……」とときどき弱音を吐いてくれたら、ドライバーもすこしは手伝ってあげようかという気になることだろう。これでは自動運転システムとはならないだろうけれど、ときにはお互いの〈弱さ〉を補完しつつ、相互の〈強み〉を引きだすという関係性も大切にしたい。¹⁰ 「さすが、慣れたもんだね……、こんなところを器用に運転できるんだから……」とつぶやく自動運転システムを横目に、ときには得意顔でドライバーがハンドルを握るような場面があってもいいのだ。

（岡田美智男「〈弱いロボット〉の思考 わたし・身体・コミュニケーション」）

問一 〰〰線部 a i e のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 線部 1 「ひとりで勝手に掃除——いつかは奪ってしまうのではないか」とあるが、そのように考えてしまうのは、ロボットがどのような点ですぐれているからか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 自分の能力や技術を向上させ続けられる点。
- イ 難しい計算でもすぐに行うことができる点。
- ウ 状況に合わせて臨機応変に行動できる点。
- エ 与えられた仕事を正確に実行し続けられる点。

問三 線部 2 「わたしたちの心構えもわずかに変化してくる」とあるが、どう考えるようになるのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ロボットにたよらず自分だけで何とかしようと考えるようになる。
- イ ロボットが失敗を繰り返す様子を健気だと考えるようになる。
- ウ ロボットのことを仕事を分かち合う相手だと考えるようになる。
- エ ロボットの欠陥を克服しなければならぬと考えるようになる。

問四 線部 3 「見方を変える」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ロボットが人間に活躍の機会を与えてくれているのだと見ること。
- イ 人間の手助けがロボットの欠点の克服に役立っていることと見ること。
- ウ ロボットの弱点をむしろ人間の弱点を知るヒントとして見ること。
- エ 人間とロボットとは互いに助け合うべき存在であると見ること。

問五 線部 4 「そこで一緒に掃除の様子を眺めてみるとおもしろい」とあるが、なぜ筆者は「おもしろい」と感じるのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 互いの様子をうかがい合ううちに、人間とロボットが力を合わせて掃除を進めていくことになるから。
- イ 人間とロボットが試行錯誤を重ねることで、これまでより効率よく掃除が行われるようになるから。
- ウ 協力して掃除を進めていくうちに、気がつけば人間とロボットが心を通じ合わせるようになるから。
- エ 人間とロボットがそれぞれ得意なことに取り組みうちに、いつの間にか掃除が終わっているから。

問六 線部 5 「そうした高度な関わりにあつては、ロボットはすべての能力を自らのなかに抱え込む必要はない」とあるが、なぜか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア すべての能力を身につけてしまえば、向上する余地がなくなってしまうから。
- イ 足りない能力があるからこそ、他者の力を引き出すことができるから。
- ウ ささまざまな個性と協働できるような能力があれば、それで十分であるから。
- エ 完璧に仕事を行う能力があると、いつかは人間の仕事を奪うことになるから。

問七 線部 6 「でもどうして、このような連携プレーが可能なのだろう」とあるが、なぜ可能なのか。解答らんの書き出しに続けて、六〇字以上、八〇字以内で答えなさい。

問八——線部7「それでおしまいということにはならないよなのだ」とあるが、どういふことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ロボットに完璧な仕事ができるのなら、人間がする仕事はなくなってしまうということにはならない。
- イ ロボットだけで仕事をこなせるのだから、人間とロボットの共生は必要ないということにはならない。
- ウ ロボットが人間の手を借りることなく、自分一人だけで仕事ができれば十分ということにはならない。
- エ ロボットと人間が仕事を分担することで、持ちつ持たれつの関係が成立するということにはならない。

問九——線部8「ロボットの高機能さは、（ ）むしろ傲慢さのようなものを引きだしてしまうよなのだ」とあるが、どういふことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ロボットが完成されたものになればなるほど、人間が自分たちの弱点を認めようとしなくなってしまふということ。
- イ ロボットの性能が高まれば高まるほど、ロボットに対する感謝や尊敬の気持ちも失ってしまふということ。
- ウ ロボットの機能が向上すればするほど、面倒な仕事は何でもロボットに押しつけようとしてしまふということ。
- エ ロボットが有能になればなるほど、ロボットがさらに便利で完成されたものとなるように望んでしまふということ。

問十——線部9「その役割のあいだに線を引いた途端に」とあるが、「役割のあいだに線を引く」とは、どういふことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人間が生活していく上での便利さと生きがいのバランスを考えに入れて、ロボットにはどの程度の性能や役割をもたせるべきかを判断すること。
- イ 一つの課題を協力してやりとげようとするのではなく、仕事をするのはロボットで人間はそれを使うだけというように立場をはっきりさせること。
- ウ ロボットの弱点を理解し、人間はそれを助ける工夫をしながらも、ロボットが得意とするところは徹底的に任せて手を出さないようにすること。
- エ ロボットの得意な領域と人間が得意な領域とを冷静に見きわめ、互いに相手の領域をおかさないように役割分担を明確に定めて仕事をする事。

問十一——線部10「さすが、慣れたもんだね……、こんなところを器用に運転できるんだから……」とつぶやく自動運転システム（ ）あってもいいのだ」とあるが、ここには筆者のどのような考えが表れているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 人工知能やロボットも完璧ではあり得ず、それを無条件に信頼してしまうことは、実は思わぬ事故や失敗につながりかねない危険をはらんだことなのだとということ。
- イ 人工知能やロボットがどれほど高度な機能を備えたとしても、やはり人間にしかできないことは必ずあり、互いに協力していくことは欠かせないのだということ。
- ウ 人工知能やロボットにあえて弱点を残しておくことは、人間と人工知能が協働することにつながり、人間の能力を退化させないために必要なことなのだとということ。
- エ 人工知能やロボットも能力が高いことだけがよいのではなく、人間が参加できる機会を残し、両者の特長を生かしながら課題の解決を目指すのがよいということ。

